

序論) 絶望によって神様を疑うことがある

私たちは、自分には受け入れられないような困難な状況に置かれた時、神様のことを知っていても、その神様の助けや救いを疑ってしまうことがあります。

「ナルニア国物語」を書いたイギリスのクリスチャン作家であり、神学者でもある C.S.ルイスは「悲しみをみつめて」という著書の中で、神様を疑ったことを告白しています。彼にはジョイという最愛の妻がいました。ジョイはルイスが 55 歳のときに出会った女性で、彼女が骨のガンであることを知った後に二人の関係が深まり、ルイスが 60 歳のときに結婚しました。ジョイのガンは結婚後、一時的に回復し、数年間の夫婦生活をする事ができましたが、1960 年にジョイは天に召されました。

ルイスはジョイの死後、その悲しみを 4 冊のノートに書き留めましたが、その中で「たすけを求める叫び声のほかには、人の魂のうちに何も無いときこそが、ほかならぬ、神がたすけを与えることのできぬ時かもしれない。」と語っています。

C.S.ルイスの著書の中には、子供向けのお話だけでなく、多くの牧師が神学的な参考書として用いている物も多くあります。それは C.S.ルイスの信仰的洞察力は鋭く、彼の信仰には私たちの模範になるところが多くあったからです。彼はそれだけ信仰深い人でした。それにも関わらず神様の助けに対して疑いを持ったのです。

絶望的な状況や困難は、私たちに神様への疑いを持たせることがあります。

1) なぜ救いが無いように思えるのか。

バビロン捕囚直前のイスラエルの人たちが置かれた絶望的な状況も、彼らに神様の救いを疑わせるだけの厳しい状況だったのでしょう。恐らく彼らは「【主】を信じていても、【主】は私たちをバビロンから助けることなどできないのだ」と、そのように文句をいっていたのではないのでしょうか。

聖書はそんな人々のつぶやきに対して 1 節のように語っています。

59:1 見よ。【主】の手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて聞こえないのではない。

【主】なる神様は、世界の創造主なるお方であり、私たちの救い主なるお方ですから、神様にとって不可能な事は一つもありません。では、なぜ、人々が苦しまなければいけなかったのでしょうか。2 節に明確な答えが書かれています。

59:2 むしろ、あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

聖書はイスラエルの咎と罪が、神様とイスラエルの間の仕切りとなって邪魔をしているのだと語っています。そうです。私たちの祈りが【主】に届いていない。【主】が私たちを助けてくれないと思える時、その原因は神様側にあるのではなく、私たち側にあるのです。

当時、イスラエルはどのような罪を犯していたのでしょうか。

3節を読みましょう。

59:3 実に、あなたがたの手は血で、指は咎で汚れている。あなたがたの唇は偽りを語り、舌は不正を告げる。

ここには、4節から8節に示されているイスラエルの罪が要約されています。

「あなたがたの手は血で」というのは、イスラエルが暴虐や暴力の罪を犯していたことを示しています。7節、8節で詳しく書かれている罪です。

次に「指は咎で汚れている」というのは、イスラエルが生み出す物がことごとくイスラエルの害となるようなものや役に立たないものだったことを示しています。それは5節、6節で詳しく書かれていることです。

そして、「あなたがたの唇は偽りを語り、舌は不正を告げる」というのは、そのまま彼らの言葉には真理がなく、嘘や偽りばかりが語られていたことを示しています。具体的には彼らが行っていた裁判には、不正な訴え、不正な弁護、中身の無い根拠や偽証が語られ、間違った判決がされていたのです。それは4節で語られていることです。

だから、イスラエルはその手は暴力を振るうことに用いられ、その指は、まむしの卵のような人々を傷つけることしかできないようなものを生み出し、そして、その口は、公正な裁判にならないような嘘と偽りに満ちていたのです。

これは当然、平和を愛し、隣人を助けることを求め、公正と正義を求める神様の心からかけ離れたものであり、罪と咎としか言えないものだったのです。

みなさん、私たちの手は、平和を生み出しているのでしょうか。私たちの指は、人々を愛し、助けるために用いられているのでしょうか。そして、私たちの口は、弱い

人達を助け、公正と正義が証明されるために使われているでしょうか。

イスラエルは、結局、人々を傷つけ、破壊し、公正と正義とはかけ離れた結果にしかならないような言動をしていたのです。

だから、彼らの祈りは【主】に届かず、バビロン捕囚といった【主】の裁きを受けなければいけないような状態に陥ってしまっていました。

2) 救いを求める者たちのうめき

もちろん、そのような状況の中でもイザヤのように【主】の救いを求める人たちがいました。9節から15節はそういった救いを求める人たちのうめきが書かれています。9節10節を読んでみましょう。

59:9 それゆえ、公正は私たちから遠く離れ、義は私たちには届かない。私たちは光を待ち望んでいたが、見よ、闇。輝きを待ち望んでいたが、歩くのは暗闇の中。

59:10 私たちは見えない人のように壁を手さぐりし、目が無いかのように手さぐりする。真昼でも、たそがれ時のようにつまずき、強健な者の中にいる死人のようだ。

9節の「それゆえ」というのは、その前までで語られていたイスラエルの罪深い現状があるため、公正と義はイスラエルになかった。ということですね。

そして、そのような状況だったからこそ、彼らは光を求めていたけども暗闇に覆われており、手探りでもがくしかなく、たとえ現実的には昼間であっても、霊的には躓くしかなく、たとえ、見た目には健康なように見えたとしても、霊的には死人のように何も出来ない状態になっていたのです。

彼らは公正だけでなく、救いも待ち望んでいました。でも結果はどうだったでしょうか。11節。

59:11 私たちはみな、熊のようになり、鳩のようにつぶつぶつうめく。公正を待ち望むが、それはなく、救いを待ち望むが、私たちから遠く離れている。

彼らは救いを求めていましたが、その救いは遠く離れている状況でした。なぜですか？12節、13節を読みましょう。

59:12 それは、私たちの背きが御前で多くなり、私たちの罪が不利な証言をするからだ。まことに、私たちの背きは私たちとともにあり、私たちは自分の咎をよく知

っている。

59:13 私たちは【主】に背き、主を否んで、私たちの神に従うことをやめ、虐げと反逆を語り、心に偽りのことばをはらんで告げる。

なぜ、救いは彼らから離れていたのですか？ 彼らが【主】に背いていたからです。【主】に従うより、【主】に背くことを選び、暴力と偽りを選んでいたからです。その最たるものが公正な判断がなされるべき裁判の場に、真理とか、真実というものがありませんでした。**14 節**の「真理が広場でつまずき」というのは、広場が裁判の場のことであり、そこに真理が入って来れない状況になっていることを示しています。

みなさん、裁判所が正しい裁判をしてくれなくなったら、どうしますか。権力者に有利な判決ばかりがなされ、国民のために正しい判断がなされなかったら、誰も私たちの権利を守ってくれません。

まあ、日本の政治家の横領とかが不起訴になっているのをみると、今の日本もだいぶこの時のイスラエルと近い状況にあるのかもしれない。と思えますけども、弱者が公正な裁きを求めて裁判所にいっても、正しい判決を出してもらえないのならば、泣き寝入りするしかない、どうしようもない状況ではないでしょうか。

しかも、**15 節**をみると「悪から遠ざかっている者も略奪される」と書かれています。つまり、悪いことをしていない人たちさえ、不正なことをしている人たちの餌にされている状況だったのです。

まさに、お先がまっくら。どんなに光を求めても、公正を求めても、救いを求めても、自分たちではどうにもならないそんな状況であったことが**9-15 節**で語られています。

みなさん、私たちが自分の力でこの世に公正を求めたとしても、救いを求めたとしても、そして、真理を求めたとしても、それが無力で終わってしまうことはよくあります。いや、事実そうなのです。私達は罪の支配、サタンの支配を受けていると罪の中で死んでいる状態ではないのです。エペソ 2 章 1 節にも「あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者」だったと語られています。

罪に支配され、サタンの奴隷とされている者は、自分ではどうすることもできないのです。では、どうしたらいいのでしょうか。

自分ではどうしようもないのならば、私たちは【主】の憐れみにすがるしかありません。

3) 罪人の状況に心を痛み、救いを与える【主】

【主】は、このような救いのない罪人たちの状況に心を痛めてくださるお方です。15 節の後半を読みましょう。

59:15b 【主】はこれを見て、公正がないことに心を痛められた。

そして、【主】が心を痛められるのは私たちの中に公正がないだけではありません。16 節の前半を読みましょう。

59:16 主は人がいないのを見て、とりなす者がいないことに啞然とされた。

罪人と神様の関係は、その間にある罪によって邪魔されている状態です。だから、これを何とかするためには、神様と罪人との間を取り持つ仲介者が必要でした。

実際、出エジプトの時、イスラエルが偶像礼拝をしたときに、モーセは自分のいのちを賭けて、神様に許しを求めました。出エジプト記 32 章 31, 32 節でモーセはこのように言っています。

32:31 そこでモーセは【主】のところに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯しました。自分たちのために金の神を造ったのです。

32:32 今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら——。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。」

「あなたがお書きになった書物」というのは、わかりやすく言うと神の国の戸籍謄本のようなものです。神の国で住む権利があることを示す書から名前を抜いていいというほど、モーセはイスラエルのためにとりなしをしました。でも、このモーセの言葉に対する神様の答えはどうかというと、つづく 33 節はこうなっています。

32:33 【主】はモーセに言われた。「わたしの前に罪ある者はだれであれ、わたしの書物から消し去る。

みなさん、モーセの永遠のいのちを賭けたとりなしは効果があったのでしょうか？ 実は、効果はなかったのです。たとえモーセが永遠のいのちを賭けて神様にとりなし祈ったとしても、神様は罪のあるものは誰でも消し去るといわれたのです。じゃあ、なんでこの後イスラエルは滅ぼし尽くされなかったかということ、それは単純に神様のあわれみのゆえです。

神様のさばきをなくすほどのとりなしは、たとえモーセであったとしても不可能でした。だから、(イザヤ 59:16a 表示) 神様は、とりなす者がいないことに啞然とされたのです。

神様は、私たちが罪に支配されて公正がない状況に心を痛められ、そして、それをなんとかするためのとりなしをする者を探してくださるお方です。

でも、私たち人間には、ほんとうの意味で、神様と罪人の間をとりなすことができる者はいません。だから、【主】はどうされたのでしょうか。16 節の後半

59:16b それで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を支えとされた。

人には、神と人の仲介をする救い主を用意することができないから、主ご自身が、私たちの救いを用意されたのです。

みなさん、罪に支配されている者が救われるためには 2 つのことが必要です。それがなにかわかりますか？

罪人が救われるために必要な事の一つは、その罪人を支配している敵を徹底的に倒すことです。神の民を罪人にしたことに対する復讐がなされるということですね。

【主】は、それをしてくださると 17 節から 19 節で語られています。

59:17 主は義をよろいのように着て、救いのかぶとを頭にかぶり、復讐の衣を身にまとい、ねたみを外套として身をおおわれた。

59:18 主は彼らの仕打ちに応じて報い、はむかう者に憤り、敵に報復し、島々にも報復をされる。

59:19 そうして、西の方では【主】の御名が、日の昇る方では主の栄光が恐れられる。それは、主が激しい流れのように来られ、その中で【主】の息が吹きまくっているからだ。

17 節の義の鎧、救いの兜、復讐の衣、ねたみの外套というのは、【主】が敵を倒す戦士として、そのための装備を整えられることを意味しています。

そして、【主】は神の民の敵に対して徹底的な報復をなされるのです。

そして、【主】の民が救われるためのもう一つのことというのが、贖いです。つまり、罪の奴隷にされている神の民を買い戻す作業です。【主】は、【主】に立ち返る者のところに、その贖いをする贖い主としてきてくださると 20 節で言われています。

20 節を読みましょう。

59:20 「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中の、背きから立ち返る者のところに。——【主】のことば。」

この贖い主こそ、私たちと神様との間をつなぐ仲介者であり、救い主であるイエスキリストです。I テモテ 2 章 4－7 節を読んでみましょう。

2:4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。

2:5 神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです。

2:6 キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自分を与えてくださいました。これは、定められた時になされた証しです。

わかるでしょうか。【主】は私たちには用意できない仲介者と贖いを与えるために、イエス・キリストを与えてくださったのです。

そして、これは誰に対してあたえられたかということ、(**59:20** を表示)「背きから立ち返る者に」です。

そして、最後、21 節の【主】の契約をみましょう。

59:21 「これは、彼らと結ぶわたしの契約である——【主】は言われる——。あなたの上にあるわたしの霊、わたしがあなたの口に置いたわたしのことばは、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、子孫の子孫の口からも、今よりとこしえに離れない——【主】は言われる。」

【主】は、キリストという贖い主を与えて、結果としてどうされるのでしょうか。それは罪の支配にあった者に【主】の霊を与え、そして、【主】に贖われた者が【主】のことばを絶えず持って、それを語れるようにされるのです。

罪の奴隷は、罪に支配され、真理をかたることができていませんでした。

でも、キリストによって贖われた者は、聖霊が与えられ、真理である【主】のことばを語れるようになるのです。つまり、まったく新しい者へと変えられるのです。

結論)

私たちは困難な状況に置かれるとき、神様の存在や助けを疑ってしまうことがあります。C.S.ルイスのような信仰深い人でさえ、そのように悩みました。しかし、イザヤ書 59 章は、救いが来ないように思えるのは神様の力が足りないからではなく、私たちの罪が神様との間を隔てているからだと言います。

イスラエルは、暴力、不正、偽りに満ちた生活を送っていました。

私たちの手は、人々を傷つけるのではなく、平和を生み出しているでしょうか。私たちの口は、嘘や偽りでなく、真実を語っているでしょうか。

私たちは自分がイスラエルのような歩みをしていないか吟味する必要があると思います。

また、イスラエルの絶望的な状況の中でも、神様の救いを求める叫びは確かに存在しました。そして、主は、そのような罪に支配された私たちを憐れみ、自ら救いの御手を差し伸べてくださったのです。

私たちには神様との間を取り持つ仲介者が必要です。しかし、私たちには用意できません。だから、【主】はその仲介者としてイエス・キリストが与えられました。

キリストは、私たちの罪を贖うために来てくださったのです。

そして、悔い改めて主に立ち返る者には、聖霊が与えられ、神の言葉を語るができるようにされます。

みなさん、たとえ困難な状況にあっても、私たちは絶望する必要はありません。私たちの罪を赦し、救いの手を差し伸べてくださる主イエス・キリストに信頼し、主の言葉を語り続ける者でありましょう。

お祈りします。